



文章撰格上 下稿

文を言を記しり言ハ心ハ述り言を記しハ美
麗を主として心を述るハ通る弁の要とされハ是と此間
少許登婆コ之後世やなりてハ許登も許登婆も一ツ
乃如くハ丹々も許登婆ハ本言花の義少言に文
字を言花とい云ハり他國も文章と書ハ字の意も
言に文ありて心乃章なるを主として云ハれハ全同
こやまり故上代の文詞ハ常に口伝の云々に記し
て口語の外ハ其のつゝれ文あるハ言に花を咲かせし



心の雅藻と云ふるが故なりと中古と云ふて此ノ雅藻
と失ひてやしく衰へよれと土佐日記竹取伊勢宇都
保等乃古物語いと云うに口語のまに記もあきと忌
まへり多れい言の花こそあせふれ言の並び句法
まの上ふと云てい古き格多く遺れと云は同一紀氏
乃筆少ても却て古今集大井河行幸歌序文にあり
てい彼土佐日記の筆法ふ方ゆる多かりといふり
且そのまのまの方いゆるりひれと云ふ改りて口語の
運ひを忘られし故あり又近者となりては
雅言を失ひていゆるりひれと云ふ能くも字音を



こみ俗い言をかきまゝて居るにほひありといふ
をもく年極れは俗いふ春ふま立ると如くもやうに
とらふまゝいふ吾古學おりのまゝてやしく古
法の明くふ成るふるとなく歌も文も千歳の古ふ
海をぬきしんたきゆるいふと云ふいふあきと
いま古への文の句法また心づかりし人ありと
いふそのまゝと云ふ専ら筆のわきと云ふは
乃びりしに筆ぬきたるそあぬと云ふことと
中古
れ文にともぬいふと云ふ言を傍らと云ふり
似されと其法けふと云ふ俗文の運ひふと云ふは

小句のつらひ也故、更ふ文章の發例と舉ぐる左の如し

實句一

異類二

光彩三

數量四

方邊五

枝葉六

疊句七

聯疊八

隔疊九

變疊十

對句十一

隔對十二

招應十三

喚響十四

首尾十五

章段十六

右の内初めの異類、小の三類連用、句もとりく、あつたそれ、
い、此、上、小、と、く、ハ、一、つ、元、三、類、連、用

可はとの句中古後ハ絶て見え、又短奇、瑣瑣中、小中
虚と名つけよ、ハ、姑く實句の例と寸その中、小二類
連用せる、ハ、
此、志、一、り、又、款、ハ、調、へ、と、重、み
か、く、多、う、れ、ハ、右、く、り、此、格、あ、る、れ、ハ、
此、志、一、り、下、よ、と、一、

凡此十八種、その詞のあやれ極なり、これハ、次に引不
乃上代の文、此章句に、此發のやりく、上、加、り、と、見
て、あやれ、詞の、い、と、ま、と、し、り、口、法、の、ま、に、い、も、ゆ、け、は
此の、い、と、ま、と、し、り、と、知、く、さ、り、さ、て
枕詞と此十八種の中、ふ、り、く、さ、る、ま、も、實句の例と
それ、い、り、枕詞、も、虚句、なる、り、稀、と、あ、れ、と、飾詞の
一、つ、ふ、て、既、ふ、枕詞、と、ま、の、ふ、り、た、り、さ、り、出

中津枝小八咫かみとより
下津枝小和幣

青和幣をりて
み様の物を

ふとみの命

あつみの命

あつみの神

あつみの命

あつみの神

あつみの神

あつみの神

同行

故やうはえて出雲國之肥の川上なる中りか
降る

其川より著流るる
其川より人

おきりて見ゆり

おきり

おきり

あつみの神

吾の名は足名椎

毒の名は手名椎

女が名は櫛名田比賣とをいし申ひ
はるはゆるをいし

奉りて 天磐戸と引あけて

天八重雲と押あけて 天と賜いさ

大伴連の遠祖天忍日命

来目部の遠祖天穗津大来目と帥てふありの船名を授け

ふしきいさの言鞠とらけ

みよあはれはとらけ

あのをとらけ

又八目の言鞠とらけ

又頭槌の言鞠とらけ

あのみよ命のふしきいさと日向の龍の高千穂の穂日二上のふ

かゝる天浮橋といかりて下界

古事紀卷上六十

天津日子番能通、藝命 天と石位とられ 天と八重多那雲と押

あはれとらけ 十別

十別て天浮橋

浮きありその言とて 坐坐の日向の高千穂

あはれとらけ 故あはれ忍日命

あはれ久米命二人

あはれとらけ

あはれとらけ

恨てあらはき御心あつておぼろ
おぼろの御心あつておぼろ

おぼろの御心あつておぼろ

おぼろの御心あつておぼろ

顯宗紀室壽御詞

法皇の御心あつておぼろ

法皇の御心あつておぼろ

法皇の御心あつておぼろ

法皇の御心あつておぼろ

法皇の御心あつておぼろ

取ゆつて法皇の御心あつておぼろ

取ゆつて法皇の御心あつておぼろ

出雲の御心あつておぼろ

出雲の御心あつておぼろ

出雲の御心あつておぼろ

出雲の御心あつておぼろ

出雲の御心あつておぼろ

祝詞式大被詞

集侍る親王の御心あつておぼろ

集侍る親王の御心あつておぼろ

語問 船根

樹根

草の片葉をも語止て 天之船座より

天之八重雲と 後威の十別

十別

神掃ひ掃ひ

天く

四方の國中へ大倭日高見之國と

安國と定まらる

下津船根の宮柱太き立

高天原の十木高ちて 皇御孫之命の瑞女御舎は之より

天の御蔭

日の御蔭とあかり坐て安國と平らくらむとて 成りて天之益
人等過犯より難くの罪事ハ天津罪と畔放

溝埋 樋放 頻時 串刺 生刺 逆刺 原戸

天津罪のり別

國津罪と生け

死は

あろひ

こくみ

己子母

己子母

己子母

己子母

己子母

けし忠の

高津神の

高津の

あつた罪出

かく出天津言事以て大中臣

天津金と本打切

未莉断て千々の

置く

置く天津菅曾と

たつ
蓋物 つかみ

本莉断

未莉切てハ針取

天津祝詞の

太祝詞事を宣ふ

天津神ハ天の岩門を押し開て

かく宣らば

天の八重雲と~~枝威~~の千別

千別てき〜~~さ~~國津神ハ

高山の末

短山の末より坐て

高山のいほり

短山のいほりをかきあけてき〜

かくき〜~~り~~皇御孫命のふ〜と始て

天下四方國よき罪と云

罪いあ〜

科戸の風ハ天の八重雲とふき〜~~り~~車の如く

朝々御務

夕々御務と朝風

夕風のふきは〜~~り~~車の〜

大洋邊と大船と船

船〜~~り~~打掃ふもの如く

彼方の繫よと本とや〜~~り~~船の

船〜~~り~~打掃ふもの如く遺る罪いあ〜

被い〜

清〜~~り~~高山の末

短山の末より〜~~り~~〜

早川の瀬くます

瀬織津比咩とりの神 大海の原と持出り

かく持出らば

荒鹽之

鹽乃八百道之

八鹽道之八百會之座以速開都比咩と神持が吞とん

かくが吞てば

氣吹戸の坐り

氣吹戸主と之神 根の國

底の國より氣吹放ちてん

かく氣吹放ちてば

根の國

底の國より速佐須良比咩と之神

持佐須良比とらひてん

かく〜 皇の朝廷に仕奉る宮々の人等と

始て天下四方は今日より始て罪とらふ

罪あり〜 高天原より再振立き物馬等

今年六月の晦の日の夕日とらふ大被

被ひてん

清く〜 諸ま〜

四國のト部等大川道より特退出て被ひ却と宮

同出雲國造神賀詞

八十日ハあはれも今日の生日の

足日ハ出雲国、国造姓名也

忍申

中界 巳命の和魂と八咫鏡と取託て倭大物主櫛瓊玉命と給て大御和の神

巳命の御子阿遲須伎高孫乃命の御魂と葛末の鴨の神

事代主命の御魂と宇奈提

賀夜奈流美命の御魂と飛鳥の神

皇御孫命の近守神と貢置て八百丹杵築宮とあり侍

神魯美命の詔と汝天穗比命

かまはふ

かまはふの御世と

まはふの御世と朝日の豊采の御世と神の御世と

臣の御世と御世と

神と獻らと申は白玉の大御白髮坐

赤玉の大御あし坐

青玉の水江玉の行相とあきつ御神と大八嶋國

あきつ御天皇命の長の大御世と御横刀廣く打堅白御馬の前足の爪

後足の爪

踏つる大宮の内外の御門ノ柱と

上津石根の踏堅め

下津石根の踏凝一振まきつゝ再の弥高し天下をさうりせしむ
みのりも白鶴シラトリの生御調イキミツのむくもあまの物とあらば大御心を多親タカニふ
彼方の古川きき

此方の古川きき一生きまわらぬのいやもあらぬ
みまらえ

須々スス伎振ギハル遠止美乃水乃ミナノ字ジ弥達知ヤタチ御をらす
まゝひの大御鏡のおもとおはしつゝんそけいそりのやみ明御神の大
八嶋國と天地

日月と共ふ安らぐ

平らぐちりしむるものよ

御賀ミガキ比神寶とこけ持く非のあやう

臣のあやうとせ

あまも天津つきての

神はまきの吉詞白ヨシノミまゝく申ウケ

同大殿祭詞

高天原の神づよりまの皇ミコがむら非らき

神はまきの命もく皇御孫命とあら

高御座タカミイマスをそそ天津璽の鏡劔と捧持賜ひてくはま宣くすあう吾
うづの御子皇御孫の命これの天津高御座タカミイマスをそそ天津日嗣と万千秋の
長秋と大八洲豊葦原の瑞穂國と

吾國と平らくちりて言ふ言ふ物

天津御量ちりて事問一磐根

木根

草の片葉とも言止て天よりまの食國の天下

天津日嗣ちりて命のみあつて今奥山の大峡小峡とちりて

齋部の

齋斧とりて伐採て木末を山神とちりて齋鉏とちり

齋柱とちりて皇御孫命の

天之御醫

日く御醫と造りてちりて瑞のみあつて世屋船命天津奇護言と

言は

きくひ白くちりて大宮地底津磐根の根

下津網根の根りけちの福

高天原ハ青雲の雷極

天の血垂飛鳥の福いなりけちの柱

桁 梁 戸

牖の錯動き鳴

事無く引造りて葛目の緩ひり

取替る草の噪きり

御床都比のちりて

よのちりて伊豆都志伎り

平らら

安らぐ守りまゝの神の御名と白く屋敷久く能運命

屋敷豊宇氣姫命と御名と六祢奉て

皇御孫命の御世と堅磐石

常磐石のいふまゝのいふまゝ

いふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

齋王作等が持ゆまゝ

持きまゝの造り仕奉る所の八咫瓊のいふまゝのいふまゝ

あつふまゝ

あつふまゝのいふまゝのいふまゝのいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝのいふまゝ

漏れらるゝと六神直日命

大直日命 きき真し

いふまゝのいふまゝ

安らぐ守りまゝのいふまゝのいふまゝ

大宮賣命の前へ白く大宮賣命と御名と申す所の皇御孫命の同殿の裏へ塞り坐くまゝ

あつふまゝのいふまゝのいふまゝのいふまゝ

言直

やりまゝの皇御孫命のあつふの御食

ゆづの御食仕奉る比礼かゝる伴の緒

いふまゝの伴の緒と

手の躰

足の躰

御下

御下

百官人

職心

宮進

宮勤

岡身

仕奉

坐

此ハ、言句、異類、墨對、章段、等の簽、所セルハ、指應、喚響、首尾、譬喻、序辭、等の簽ハ、多くハ有リ、そのも、凡古文、此等の格とも、具足口もあらざれども、更ニあること、思ふやうなり、大むねハ、長奇、短格の方ニあること、見合て、こと、通シ、さて右の簽の内、実句の部ニ、終らハ、く、足、えん、るも、一、凡態藝のうへ、體用の語ニ因テ、替、例ハ、みそぐと、い、は、ふ、と、い、用、語、よく、意、句、と、なり、みそぎといひ、はらひとい、時ハ、體語よく、実句と、なり、例ハ、既、短奇、撰格、い、る、や、一、又、賀ハ、ほ、ぎ、ほ、ぐ、ほ、ぐ、ひ、とい、とも、形、皆、意、句、な、れ、と、種、ほ、き、言、ほ、ぎ、な、と、い、時ハ、上、の、言、二、幸、れ、く、実、句、の、例、と、なり、又、別ハ、わ、き、わ、く、わ、う、と、い、時ハ、形、皆、意、句、な、ま、と、も、千、別、又、積、成、の、千、別、な、と、い、時ハ、これ、も、上、の、言、二、ひ、ら、被、て、実、句、の、例、と、な、れ、り、又、光、彩、部、も、終、ら、ハ、一、き、あり、短、山、と、對、て、高、山、と、い、一、歌、も、方、邊、の、例、と、一、接、威、の、高、鞠、又、高、夫、原、等、と、採、へ、て、云、る、も、光、彩、の、例、と、一、て、其、簽、と、あ、り、り、天、果、と、い、へ、る、も、は、て、ら、う、と、く、其、用、い、状、と、因、て、其、簽、の、換、る、り、あ、る、へ、き、な、り、

此等ハ何の格とハなく只古文の大なるれとて知せしむなり
凡、古文と圖とバこれの書と大なるかゝるものあり申古後
とたりてハいふもてしむるなりしもの右等の簽に記して圖
乃ち此あやかりぬるなりしもの一先とて以て古への傳を
得るなりと知る也他、圖と然るものありしもの

漢籍 老子上篇

孔德之容、惟道是從

道之為物、惟恍

惟惚惚兮恍兮、

其中有象、恍兮惚兮、

其中有物、窈兮冥兮、

其中有精、其精其真、
其中有信、自古及今、其名不去、以閱衆
甫、吾何以知衆甫之然、我以此

莊子 齊物論

天下莫大於秋毫之末、而泰山為小、

莫壽乎殤子、而彭祖為夭、天地與我並生、而

萬物與我為一、既已

為一矣、

且得、有言乎、既已為一矣、

且得、無言乎、一與言為二、

二與一為三、自此以往、巧歷不能得、而况其

凡乎故自無適有以至於三
而况自有適有乎

無適焉因是已云々

同 養生主

吾生也有涯而知也

無涯

以有涯

隨無涯殆已已而為知者

殆而已矣為善無近名

為惡無近刑緣督以為經

可以保身

可以全生

可以養親

可以盡年庖丁為文惠君解牛

手之所觸

足之所履

肩之所倚

膝之所踣 砉然騞然

嚮然奏刀

騞然莫不中音合於桑林之舞乃中經首之會

文惠君曰善哉技蓋到此乎

左傳 隱公元年

請京使居之、謂之京城大叔、祭仲曰、

都城過百雉國之害也、先王之制、

大都不過參國之一、

中五之一、

小九之一、今京不度非制也、

君將不堪、公曰、姜氏欲之、焉辟害、

對曰、姜氏何厭之有、不如早為之所、無使

滋蔓、

蔓難圖也、

蔓草不可除、况君之寵弟乎、

同 僖公四年

齊侯以諸侯之師侵蔡、

蔡潰、遂伐楚、

楚子使與師言曰、

君子處北海、

寡人處南海、唯是風馬牛不相及也、不虞君之涉吾地也、

何故、管仲對曰、昔召庚公命我先君大公曰、五侯

九伯女實征

之以夾輔周室、賜我先君履、東至于海、

西至于何、

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

日卷六 文二十九丁

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the left page of the manuscript.

日 文 一 十 九 一

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the bottom portion of the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a page header or title.

Main body of handwritten text in a cursive script, consisting of several lines of prose.

Main body of handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page.

Main body of handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the right side of the page.

同
五丁

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the left side of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the right side of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, covering the left side of the page.

Handwritten musical notation on the top line of the right page.

琴後集 文二五丁

Main body of handwritten musical notation on the right page, consisting of approximately 12 staves.

Handwritten musical notation on the top line of the left page.

Main body of handwritten musical notation on the left page, consisting of approximately 12 staves.

同 文二五丁

Main body of handwritten musical notation on the left page, consisting of approximately 12 staves.

Handwritten text at the top of the page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 lines, starting from the top right and moving downwards. The script is dense and difficult to decipher without a key.

大合庵隨筆

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation from the previous page.

同 三段

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

宇都保物語後落 市丁

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

Handwritten line of text.

按此後三日... 大使到使... 十六年... 年

1 按此後三日... 源氏物語... 二二

ちつちえあはる物因て成せる神の命名はうまひひい
の神

次に成せる神の命名は、天に常之の神

此二柱の神も、あはる物神成して、みちを授けしき

と云ふは、神代巻の事、昔くは、神代巻を厭ふ記者の見り、

其餘この事とみく、右の本文の如く、かきかへるもの

と云ふは、次に神代七代まゝ、皆此趣よく、一章

と毎、天地初成之時、言ふより、あはる物あり、ちつちあり

らむひら

同記 十三丁

故爾伊邪那岐命詔之

愛ウツクしき吾ウガらふもの命や子の一ツ言ふは、詔ふひて

御抱へははるひ

御足へははるひて、流すま、時中、是をぬらう、千引石と具より、千返りて

具石と申置と云ふ

まゝして、車戸とや、ひひ、伊邪那美命申へははる

愛しき吾らその命かくて、まゝ、まゝの國の人草い

千のらるひ

詔ふし、申へははるひ、伊邪那岐命詔ふは

愛しき吾らその命かくて、まゝ、まゝの國の人草い

千五百のらるひ

詔ふし、申へははるひ、伊邪那岐命詔ふは

同日、答曰、答告、誨告、議云、やうの影ハ此回の言漢文風小直セ
つかりとれらと合せて文の表の全くに古語がぬるを
へしきすこゝ引ふの文 いろしと上合せ引けり

の左れゆゝに纏せり

とわして

とみよかみて吹くつるいぶの真意成りて神の御名ハ……

のみろくに纏せり

とわして

とみよかみて吹くつるいぶの真意成りて神の御名ハ……

の左れゆゝに纏せり

とわして

とみよかみて吹くつるいぶの真意成りて神の御名ハ……

の左れゆゝに纏せり

とわして

とみよかみて吹くつるいぶの真意成りて神の御名ハ……

出雲風土記上 新本四丁

意字とらつけしゆゆゑハ國引よるハ東水臣津野命の詔よりハ雲出雲國ハ
狭布の稚國なり

幼國らしきつらりかれ作り縫いと詔よりて栲合とらる
三崎を

國の餘りありやとらるハ 童女の胸鈕とらる
國の餘りありと詔よりて 大魚の鰓突とらる

旗薄はりしとけし 三槎の綱とらる

霜葛とらる

河舟のわらわら 國を来と引来縫る國ハ去豆の打絶よりて八百工

并築の所崎なりかて固堅立し石見國と

出雲國よの坂りる名ハ佐比賣とらる

又持川の綱ハ箇の長浜とらる又北門とらる國と

國の餘りありやとらるハ 童女の胸鈕とらる

國の餘りありと詔よりて 大魚の鰓突とらる

旗薄はりしとけし 三槎の綱とらる

霜とらる

河舟のわらわら 國を来し國来し引来縫る國ハ去豆の打絶よりて狭田の
國とらる又北門農波の國と

國の飾りありやとんれい

國の飾りありと詔まひて 童女の胸鈕とて

大魚のこぶつとわけて

旗薄はすりわけて 三槎の綱うらわけて

霜つらうらわけて

河舟れりてつらうらわけて 國未上國未と引未續を國ハ千倍タエヒより

圖見國クラミとわたり 又高志の都々の三埼と

國の飾りありやとんれい

國の飾りありと詔まひて 童女の胸鈕所トラミ取て

大魚の鯁衝わけて

旗薄はすりわけて 三槎の綱うらわけて

霜黒葛シモツクとわたり

河舟れりてつらうらわけて 國ハ引未續を國ハ三穂の埼より

持引を綱ハ 夜見島とわたり

固堅カタムと加志ハ 伯耆國ハヤの大神の岳とわたり

今者國ハ引訖れと詔まひて 意宇杜ハ 佛杖衝立て 意恵と詔まひて故

云意宇

上の條とかく章段毎ふ吾むふとの命やまめゆもともゆらに

さぶみふみみてまことあり今此條小國の飾りありやとんれい

ハ國の飾りありと詔まひて 童女の胸鈕とて

並ともりて是ふ同とてのそらうらわけて

かり故古文の句法とて別とむらうらわけて

物とてぬ女もども又或いはかゝるる人の物法もあつてとて
之れに筆記してこれ其れが即古文の句法ありと
おの人の言うていふとてはこれいひつけてさめるなりと文と
成さるなり中昔より筆のなるとりて裏へまゝといひぬとてあ
つたり於ては風土記の文のつらふとてまゝとて一記紀の
文も一部つらふとて右のこゝに録されば神話のまゝとて
と漢字とてまゝとて言のあやとあやとあひまぬ祝詞と此等と
あつてを神とて奉る詞は常の文に規則とてハカ一類
きり多かり又其章句は獨長なるもやあつてとて今
つらふに據ていふとて假し三條のなるとあり

其一ハ、飾り詞の多き故也、其二ハ、疊句の多き故なり
其三ハ、章段の多き故也、飾り詞を、とて水徳國と云
ふとて、千五百之長五百秋之水徳國といひ、とて御饗と
云ふとて、皇御孫命乃、遠御膳の、長御膳といひ、とて木
と伐てと云ふとて、遠山近山、生立苗大木小木と、本
打断、末刈切て、持参来て、たゞの類をいふ、疊句多
しとて、とて栲と云ふとて、御服者、明妙、照妙、和妙、荒
妙、とて重ぬ、とて守と云ふとて、下より往とてを、
下と守り、上よりゆくものを、上と守り、秋の守り、日の守り
と、守り奉る、とて重ぬ、とて地と、宮と定ていふ
ふとて、吾宮者ハ、朝見日向日處、夕日の日隱る處の、龍



